




平成28年度水稲生育診断予測事業速報No. 6 (普通植栽培 8月3日調査結果)

平成28年8月5日
栃木県農政部経営技術課

-  **普通植「あさひの夢」は8月7日の週が追肥適期。**
-  **早植は出穂期～穂揃期。高温障害を防ぐ水管理と適期収穫に向けた早めの準備を。**
-  **イネ縞葉枯病が発生している。再生稲は感染源になるので、収穫後は速やかな耕起を。**

1 気象概況

【7月下旬～調査日（宇都宮）】

7月下旬は低温・寡照・少雨（平年比：平均気温 -1.6°C 、日照時間77%、降水量13%）で推移した。梅雨明けは平年に比べ7日遅く、昨年に比べ18日遅い7月28日であった。

2 調査結果

(1) 普通植栽培（あさひの夢）〔詳細：別添表1、図1〕

- ① 草丈は79.1cmで平年比104%と高く、茎数は432本/ m^2 で平年比102%とやや多い。
- ② 葉齢は12.1で平年より0.1葉多く、葉色は4.0で平年並である。
- ③ 葉色×茎数値は1,705で平年並である。
- ④ 幼穂長は0.10cmで平年並である。
- ⑤ 葉いもちが2か所で確認されており、昨年同様、発生程度は高い。

3 技術対策

(1) 普通植栽培

① 穂肥

穂肥時期は出穂18～20日前、施肥窒素量は10a当たり2～3kg（BBNK-202号、窒素量の50%は緩効性）を基準とするが、生育診断値（葉色×茎数値）が指標値を下回る場合は早めに施用するか増肥し、上回る場合は遅らせるか減肥する（下表）。幼穂長と葉齢から推定すると、穂肥適期は8月7日～11日を中心とした第2～第3半旬と考えられる。必ず幼穂長によりほ場ごとの出穂前日数を把握し、穂肥の施用時期を決定する。

表 普通植「あさひの夢」の生育診断指標値（栽植密度22株/ m^2 ）

時期	葉色	茎数/ m^2	生育診断値 葉色×茎数
最高分けつ期	4.6～4.9	530～550	2,400～2,800
出穂前25日	3.8～4.2	440～470	1,700～1,900

② 水管理

現在は幼穂形成期頃であり、定期的な間断かん水を継続し、根の活力を維持する。

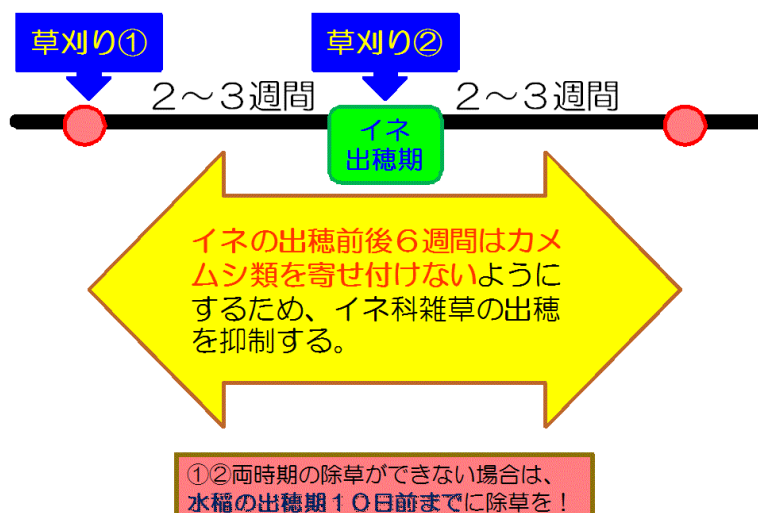
③ 病害虫の防除

ア 斑点米カメムシ類

農業環境指導センター発表（28年7月22日）の「平成28年度 病害虫発生予報第4号」によると、今後の発生予想は「やや多い」とあり、注意が必要である。

斑点米カメムシ類はイネ科雑草等の穂に引き寄せられて飛来するので、本田内の除草及び水田周辺の草刈り（水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回）を行ってカメムシ類の発生しにくい環境を整えることが必要である（下図参照）。さらに、穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は薬剤防除を行う。

なお、薬剤散布に当たっては、養蜂家へ事前周知するとともに、ミツバチの活動が盛んな時間帯（午前8時から12時）を避け、飛散しにくい粒剤等の殺虫剤の使用に努める。



イ いもち病（葉いもち）

葉色が濃いほ場では、発病している株が認められる。BLASTAM (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2016.htm>) など農業環境指導センターの発生予察情報等を参考に、早期発見・適期防除に努める。

ウ 紋枯病

発生を確認した場合は穂ばらみ期～出穂期に防除を行う。発病程度が高い場合、玄米の登熟・品質が低下することから、昨年発病が多かったほ場では必ず防除を行う。

エ 害虫

農業環境指導センターが発表する発生予察情報等に留意し、適切な防除を行う。

(2) 早植栽培（コシヒカリ）

① 水管理

現在、出穂期～穂揃期となっている。出穂期・開花期は最も水を必要とする時期なので、その時期は水が不足しないよう、こまめな間断かん水を行う。

平成28年8月4日気象庁地球環境・海洋部発表の「関東甲信地方1か月予報」では、向こう1か月の平均気温は高い確率が60%と予想されている。また、同日、同部発表の「高温に関する異常天候早期警戒情報（関東甲信地方）」では、8月9日頃からの約1週間はかなりの高温（7日間平均地域格差+1.7℃以上）と予想されている。出穂期から登熟期（特に登熟初中期）にかけての異常高温は、稲体を衰弱させ、乳白等の白未熟粒や胴割粒の発生を助長するので、夕方から夜間のかん水により地温を低下させて、根の活力維持に努める。なお、高温時の常時湛水管理は高水温により根腐れが起きやすくなるので、水温に注意する。

さらに、高温のほか、風などによる急激な湿度低下なども白未熟粒・胴割粒の発生原因となることから、気象条件には十分注意し、適切な水管理を行う。特に、台風襲来時の強風や、通過後の乾燥した強風（フェーン）が予想される場合はやや深水とし、脱水による青枯症や白未熟粒の発生を防止する。

【白未熟粒（乳白等）が発生しやすい基準温度】

- ◇ 出穂後20日間の最高気温の平均：32℃以上
- ◇ " 平均気温の平均：27℃以上
- ◇ " 最低気温の平均：23℃以上

【胴割粒】

- ◇ 出穂後10日間の最高気温の平均：30℃以上

ただし、現在、渡良瀬川流域で10%、利根川（鬼怒川）流域で20%、那珂川水系（深山ダム）では50%の取水制限がそれぞれ実施されている。また、降水量も平年に比べ少なく、ダム貯水量も少ないことから、地域の話し合いによる番水等、水事情に合わせて効率的な利水に努める。

② 適期収穫

前回の速報No. 5で予測したとおり、早植コシヒカリの出穂期が平年よりも早まっている（表2）。出穂後の気温も高く推移していることから、成熟期も早まると考えられる。収穫開始時期は、県南部が8月第6半旬、県中部が9月第1半旬、県北部（標高の高い地域を除く）が9月第2半旬からと予想される。刈り遅れを防ぐため、出穂後1か月を過ぎたら帯緑色籾率（不稔を除いた全籾に対する緑色籾の比率）を確認し、10%になったら収穫を開始し、3%までに終了できるよう、前もって準備しておく。

さらに、全体的に出穂期の葉色が平年よりも淡く、高温による胴割粒、白未熟粒の発生が懸念される。出穂前の地域で、出穂期の葉色が4.0を下回るほ場では、穂揃い期までに速効性の肥料（BBNK-707号等）で10a当たり窒素成分1～2kgを施用する。

表2 平成28年度水稲生育診断ほ調査結果（早植栽培コシヒカリ出穂期調査(8月3日終了分)）

No.	設置場所	施肥区分	出穂期(月日)			葉 齢			葉色(葉色板)			葉色(SPAD)		
			本年	平年	差	本年	平年	差	本年	平年	差	本年	平年	差
2	大田原市桜木沢	早植分施	8.02	8.05	-3	13.2	13.1	0.1	3.4	4.3	-0.9	34.7	32.2	2.5
3	太田市箱森新田	早植分施	7.30	7.29	1	13.4	13.3	0.1	4.2	4.0	0.2	36.3	33.5	2.8
4	那須烏山市福岡	早植分施	7.25	8.01	-7	13.1	13.2	-0.1	4.2	4.8	-0.6	35.8	35.4	0.4
5	日光市木和田島	早植分施	7.27	8.05	-9	13.0	13.2	-0.2	4.4	4.6	-0.2	34.4	33.0	1.4
6	鹿沼市笹原田	早植分施	7.26	8.01	-6	13.0	13.4	-0.4	4.9	4.7	0.2	35.4	33.7	1.7
7	宇都宮市平出町	早植分施	7.28	8.02	-5	13.1	13.5	-0.4	4.7	4.7	0.0	33.3	33.0	0.3
8	真岡市清水	早植分施	7.25	-	-	13.1	-	-	4.6	-	-	38.0	-	-
9	小山市間中	早植分施	7.20	7.29	-9	13.8	13.2	0.6	4.2	4.7	-0.5	34.6	32.8	1.8
10	農業試験場本場	早植分施	7.28	8.02	-5	13.1	13.2	-0.1	4.3	4.6	-0.3	35.1	36.7	-1.6
11	那須塩原市一区町	早植全量	8.01	8.04	-3	12.4	13.4	-1.0	3.5	3.8	-0.3	34.8	32.0	2.8
12	塩谷町玉生	早植全量	7.31	-	-	13.0	-	-	3.6	-	-	33.7	-	-
13	那珂川町高岡	早植全量	7.31	7.30	1	13.3	13.3	0.0	2.9	4.1	-1.2	28.6	32.9	-4.3
14	宇都宮市駒生町	早植全量	7.29	-	-	12.9	-	-	4.6	-	-	34.3	-	-
15	芳賀町東水沼	早植全量	7.28	-	-	14.0	-	-	3.8	-	-	31.9	-	-
16	農業試験場本場	早植全量	7.30	7.31	-1	13.0	13.1	-0.1	3.6	3.9	-0.3	33.2	34.9	-1.7
分施平均			7.28	8.02	-5	13.1	13.3	-0.2	4.3	4.5	-0.2	35.0	33.9	1.1
全量平均			7.31	8.01	-1	12.9	13.3	-0.4	3.3	3.9	-0.6	32.2	33.3	-1.1
全平均			7.29	8.02	-4	13.1	13.3	-0.2	4.0	4.4	-0.3	34.2	33.7	0.4
Ⅱ	なすひかり(農試本場、早植分施)		7.26	7.28	-2	12.1	12.3	-0.3	4.3	4.3	0.1	35.9	36.8	-0.9
Ⅲ	とちぎの星(農試本場、早植分施)		8.02	8.02	±0	12.7	13.0	-0.3	4.0	4.4	-0.4	33.6	38.2	-4.6

③ 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病対策

現在、県南部の早植栽培で発生が多く確認されている。

収穫後、イネ縞葉枯ウイルスに感染した株から伸びてきた再生稲（ひこばえ）を放置すると、ヒメトビウンカの個体数増加、保毒虫率の上昇を助長する。収穫後は、速やかに耕起して発病株をすき込むとともに、次年産では「とちぎの星」等の抵抗性品種の作付を増やす。

イ 斑点米カメムシ類

穂揃期に水田内で斑点米カメムシ類が確認できる場合は、薬剤防除を行う。常発地では第1回目防除から7～10日後の追加防除を行う。

ウ いもち病（穂いもち）

葉いもちの発生が見られ、その後降雨が続き、多発のおそれがある場合は、出穂始めから穂揃い期の防除と、穂揃い期後7～10日後の追加散布を行う。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が携帯電話等に直接メール配信される
「とちぎ農業防災メール」のご登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール配信される
「栃木県防災メール」のご登録をお願いします！



↑「とちぎ農業防災メール」
登録はコチラから



↑「栃木県防災メール」
仮登録はコチラから